



新拾遺和歌集  
下

特別  
A4  
8099  
19(2)



5

LC

2  
14  
8099  
19  
(2)

< 2001-042 >



國學研究會  
 圖書館  
 藏書  
 民國二十九年  
 十月  
 二十日  
 北京

2

2



後二位家隆

かほきわたるは山いほもきあふれ我々のまゝに

群々

殿前門院大輔

形なきもさしつねの意欲もへん神を寄けりま

光の孝も入道并格政家首を寄り名不立

お中納言定家

手ひ子も本意明しく柱石を分るを名もはしり

百を執るまうりては実風志

前大納言實明

なれつと暗くはたなりあはかりんを治るてん

群々

後人あつ

本間より影のまゆり月影あふはれんをてん物

文保百を執るまうりてん

前大納言經純

月影より初夜深のまうりてん

歌言出意

聖言親王

かこつては海をむき若出るまうりてん

文保百を寄るまうりてん

法印定春

昔はとも海をむき若出るまうりてん

忠貞の中

源氏經朝

りひも本意あふむき若出るまうりてん

大慈の隆博

神ありてやと人言はれしは神ありては神ありて

語人し

浅き水も浪をたてり人言はれしは神ありては神ありて

延和十三年身主院言命を急をうり

躬恒

浪川ありて水ありて神ありては神ありては神ありて

神あり

権中納言實直母

うりてはりてふまむ人言はれしは神ありては神ありて

弘安元年日蓮宗を急をうりては神ありて

前大納言の氏

山川の神ありては神ありては神ありては神ありて

神あり

平常形

神ありては神ありては神ありては神ありて

悪念の心

達智の院無清結

七人の神ありては神ありては神ありては神ありて

九條前内大臣家百を急をうり

土御門院小宰相

七人の神ありては神ありては神ありては神ありて

悪念

兼好法師

七人の神ありては神ありては神ありては神ありて

平忠文の朝臣

あるにたりる世まきのひ出まきのふりかきけりる  
建仁五年新世の命を悪悪

前大佐正慈鎮

あるにたりる世まきのひ出まきのふりかきけりる

皇太后之次大佐後成

あるにたりる世まきのひ出まきのふりかきけりる

西園寺内大臣

あるにたりる世まきのひ出まきのふりかきけりる

正三位知家

あるにたりる世まきのひ出まきのふりかきけりる

文保五年新をまきのふりかきけりる  
後二位宣子

あるにたりる世まきのひ出まきのふりかきけりる

権中納言云雄

あるにたりる世まきのひ出まきのふりかきけりる

常元法師

あるにたりる世まきのひ出まきのふりかきけりる

正和五年九月十三日

あるにたりる世まきのひ出まきのふりかきけりる

あるにたりる世まきのひ出まきのふりかきけりる

時首首あきしなるふ月新志意

前大納言為定

いふて海つまに影とる月を袖共交りし川も

野々

平英時

誰の海と入る杉り人志きあきけりわく枝枝

前系次為副

枝を海海ともちかこころあをゆきさけし

寄山慈

法印賞為

又河をまらけりたりぬせりし川を神の志り大

変治二の首言言もろ時寄雨意

後西園寺入道前大政大臣

あまのの我の影交りしをたはしむる海むる

百言新志をまらけりし川寄杜意

権大納言義治

あまの志交りしをたはしむる海むる

入道二の親玉性助家早首言不

法眼深兼

あまの志交りしをたはしむる海むる

又承子同九月内裏三言言寄菊之志

大慈の隆博

種くし袖も倒れぬわき行もは菊乃志打れも

志久志と

右清の徳教定









祇代の権とある百五の秘を志つたりて止まずん

権中納言寛耀

いさめは権の筆をいつたりとやむりき度山とる人

人磨

あひまの妹とがふせんむとあつとあつとあつとあつと

長祿の元良親王

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

白鳥百番の命

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

文保百とあるをけり時

権中納言云雄

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

百とあるをけり時

権中納言云義詮

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

文保百とあるをけり時

前大納言云為定

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

後三位為信

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

前右兵衛尉の教

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと





寄露函

前大納言良教

何處の事案にあまう露をせよと云ふ所ありてかき懸ん

百首言中よ

式子内親王

且袖かりありていふも終りあさたは終るにうらみあ

垢河尻津時をてまつりまう百首詠よ

権大納言云實

うよのこころをみればは人終りすらもさそをるん

寄鏡雲の心

土御門院内親

まし鏡あひまきんをみればはしはしはのたふし

赤元百首言中よ

法印定為

口中をきき山をばしは鏡をえりて今も新とやいふ

心

権中納言實直母

山馬のたふし鏡のしをりてみれば新と云ふ

鴨祐夏

河をえらうそいひのそてあすをたつる中に無言

後思屋前用白左大臣

逢まえとたのむかきし馬をよもふんをいひ

松とてすてんをえつとめてとりふとをてまつ

ちし言中

伴規太物

今世のむねのむねをたつるたあそあそ新と

心

壽成門院

多しぬ氣をとりて松の世乃ち流りわやと云はれたるは  
後白河天皇の御代に

藤原門院

みまのあはれを多くて舟をたてしむるは  
延和十三年春子院の命に應

らるる

若くは船の油をひく舟の油をたぐるは  
延和十三年

たれもかたはれにけり海と舟のちりるは  
和泉式部

和泉式部

らるる海のおまじきりるは舟のちりるは  
我皇と云はれたるは

道曉法師

あまのうみは海は舟のちりるは舟のちりるは  
後深草院の御代に

あまのうみは舟のちりるは舟のちりるは  
舟のちりるは

舟のちりるは

後白河院の御代

逢事と見はてた舟のちりるは舟のちりるは  
百と船をたてしむるは

権中納言時光

いづれかたはれに舟のちりるは舟のちりるは  
文保百と云はれたるは



前大納言の定

いふ事人より母の心はさきかたきけし神の儀也

百首言きし時 倣安門院一葉

わ事流りたる心まじくまをみし人し事乃以らん

心 前番談為秀女

く親母のたりたる心さきさきより身より心なる海流

妻をとりたる目共の心はさきさき

賀茂成助

春さきはさきさきさきのかささきさきさきんをが舞

梅乃花さきさきさきさきさき

大宰大貳高遠

たさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

年比物中よりまねといつて風を感得る事

いふ心はまねといつて風を感得る事

いつさきさき 基後

いふ事下組さきさきさきさきさきさきさき

先的者も入道前梅改家憲十首言合と事節

無 同院梅改左大臣

はさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

後堀河院氏名典傳

かりたあふじさきさきさきさきさきさきさき

心 月法師

行ふと云ふをいふは法にあらざるにけり心ありて

源徳云

格たる宿をいふはつと云ふ三悔の山と云ふことなり

行業法師

法をよ初瀬の桂原河原より流はるる深きと云ふ

八條入道内大臣

みえにきつと云ふはたりつと云ふことなり

三善為連

非ふと云ふはあやまりと云ふことなり

依憲新也

和太納言為定

無きと云ふはあやまりと云ふことなり

百首詠をいふはつと云ふことなり

開白前左大臣

河原より生田の村より河原原目までいふことなり

正和五年九月廿日後醍醐院宣旨に此文あり

と云ふ十首あり一と云ふは見不達也

後三位行尹

あらねばと云ふはあやまりと云ふことなり

後三位為理

逢事と云ふはあやまりと云ふことなり

中納言為藤

と云ふ中納言のあやまりと云ふことなり

人日まのめじきんとひなをうりゆりてはさるるはたき

いさくらのまね 藤原棟相

あまのりんげいといひらるるまをいれは海をまうかぬん

群 兼 兼大納言為兼

海をうりめたらを疾おく志はひまをあつめは

友原為清

あまのたてまうすじまにあつれを我く志はまをいれ

兼大納言為世

群 兼 兼大納言為世

あまのりんげいといひらるるまをいれは海をまうかぬん

あまのりんげいといひらるるまをいれは海をまうかぬん

兼用無といふ事といふ事

深藤經

あまのりんげいといひらるるまをいれは海をまうかぬん

群 兼 兼大納言為世

あまのりんげいといひらるるまをいれは海をまうかぬん

兼大納言為世

兼大納言為世

あまのりんげいといひらるるまをいれは海をまうかぬん

兼大納言為世

あまのりんげいといひらるるまをいれは海をまうかぬん

兼大納言為世

伏見院の御

ふと胸あひさうに愛のきこひつらきりて  
中納言匡房の家言合ふ無乃也

源入一

あさつたに松のさかえりてあさつたに松

憲三のち  
實方朝臣

あさつたに松のさかえりてあさつたに松

小將

あさつたに松のさかえりてあさつたに松

源頼康

あさつたに松のさかえりてあさつたに松

同窓といふ事

権大納言義隆

あさつたに松のさかえりてあさつたに松

源一

法印良寛

あさつたに松のさかえりてあさつたに松

前大納言為兼

あさつたに松のさかえりてあさつたに松

元亨三の八月大納言為兼の御事ありて

さうりてあさつたに松のさかえりて

前中納言隆長

あさつたに松のさかえりてあさつたに松

憲三といふ事

前大納言公藤

世にけく我を流しむる有らん此より其と標を

慈宗の中二 善源法師

むらある世もあつても此の分ちむらある人

慈光百首のあつても不達意

前大納言實教

あまりにたつた福の業でいふあつた標したる

慈宗一 後惠法師

逢もたつた人命のあつても此の分ちむらある

二所法親王性助家平を并に

前大納言為氏

あつたむらある世もあつても此の分ちむらある

二所法親王覺助家平首領を不達意

藤原基任

此世のあつた我もあつても此の分ちむらある

慈宗の中二 金光院入道希有太師

あつたむらあるのつてもあつても此の分ちむらある

法印定慧

あつたむらあるのつてもあつても此の分ちむらある

宗惠法師

逢事ふかむらあるをたれむらあるをたれむらある

三善信方

あつたむらあるのつてもあつても此の分ちむらある

殷面門院大楠

たふあふふ志井とふふうう記号とふふふふふふふ

子夏百番ありて 年蓮法師

作瑞光海の志ふせうたひく信教の社ふふふふふふ

建長二年島形ふて寄水志也

冷泉前太政大臣

志記とむつ山井のふふ新ふたをふて被と志記ふふふ

年一原 永福門院

ふふあき記ふふふふ村ひふふふふふふふふふふ

友直頼清朝臣

ふふ志記ふふふふ思川たふふふふふふふふふ

百景記ふふふふふふふふ寄楊志

梅雲伴實継

ふふふふ志記ふふふふふふふふふふふふふ

寄河志 源頼康

村ひふふふ志記ふふふふふふふふふふふふ

名前ふふ中に 大庭山有家

ふふふふ志記ふふふふふふふふふふふふ

志記一原 武貞門院沙連

ふふふふのふふふふふふふふふふふふふ

前桑後為秀

志記ふふ志記とふふふ志記ふふふふふふ

山平入道前太政大臣

あまがさき後のはるもあはれうつさきあまにたれをい

権大僧都信聰

ふもせよふんや深川のけうあまをいし神あま

資成のむもあまをいしあまをいし下野守徳徳あ

ねと園くといつうーいあ

前中納言匡房

煙の室のたれあまあまをいしあまをいしと我梅りき

恋あま中

平忠度朝臣

ふもせよは結あまをいしあまをいしあまをいしあまをいし

法印村基

さうのそあまをいしあまをいしあまをいしあまをいし

伴周清

逢草にふああまをいしあまをいしあまをいしあまをいし

小侍法

あまをいしあまをいしあまをいしあまをいしあまをいし

あまをいしあまをいしあまをいしあまをいしあまをいし

鷹司次帥

あまをいしあまをいしあまをいしあまをいしあまをいし

あまをいし

源賴隆

あまをいしあまをいしあまをいしあまをいしあまをいし

源宗範

あまのつぎにききしむる神の御心はくわく神ふ  
百を言ふとまうつりごとき奇衣恋

藤原雅冬朝臣

ひらけの海の家はむき衣の料とて枯やとてん

急言中  
鷹司淡路守

ふれいせとめとの月影とてたりなむ物枯らん

後醍醐院御製

なつたぐさむもえさなうしむは月みぬらりて

おき神ふ

新拾遺和歌集卷第十三

戀歌三

百を言ふ中  
土御門院御製

ひらけの海の家はむき衣の料とて枯やとてん

急言中  
新七将

なつたぐさむもえさなうしむは月みぬらりて

前大納言為家

ひらけの海の家はむき衣の料とて枯やとてん

急言中  
急言中

土御門入道前内大臣

なつたぐさむもえさなうしむは月みぬらりて





大井河内守のまゝあはれおきた松のうへにたゞまのりん

百首歌ありし時 入道三浦親王は守

約をたゞたききとていさうふのいともうへ物なをえふ

飯安門院一条

そのめも又うらうらと物と書ふらきとをたつた

悪約恋 権大納言宣明

たの書ふとてうらうらと思ふとあはれいのかきと

群 賀茂雅久

たてきりたとのたにうらうらとたのびるはかきと

藤原の冬朝臣

仍のら記もたてきりたのりもあはれはたきと

後三位藤子

いさなりたのたきとたのびるち記の書はたきと

大江忠幸

約をたてきりたのりもあはれはたきと

後三位藤子

後三位藤子

たの書にたてきりたのりもあはれはたきと

後三位藤子

後三位藤子

たのめは仍とていかにうらうらとたのびるはたきと

後西園寺入道あはれはたきと

一可とい約也せまう 仍のう終たなまあひあかりせ  
文保三年百景歌をまうりきつ時

津守國冬

仍をまわればそ結わくたうくはるるあきり非

野々原

後醍醐院女苑の五代

つらみ疾打りよたのそやかたはか河を築きん

待戀の心と

入道親王の道

かくけりまればさるあかす木のまのあかたうそ

女のとこらやうあまいつけく甲約きり

よるく〜原

たがめあ〜まき仍のしゆ〜まはあ〜るあ〜るあ〜る

也

津妙子園白前左左氏

まそ〜あ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜る

野々原

〜原

世中にま〜る仍たうりせいたのあな〜るあ〜るあ〜る

連夜待急〜り事と

源孝朝

たぬや〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜る

赤元百景歌を時

中細云為藤

けら〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜る

野々原

法印津井

修の契りは名もつらんをいふはあはれりまらん

中務の宗尊親王

ふかきとたつさし物と修のあま世たれは誰のいふ

お元白を親をけり

殿後三位為子

夢をたとはのむも出修のちんき業に河なるひん

待急心は清約なり

廉仁王

く修して約あせとえうきの程のせりは修のいふ

あのかん

大慈の隆博

河をえらふ修あまの物とまふまふは修のいふ

如雄法師

修のむらき程のつらふらり又業をいふは修のいふ

権律師則祐

流はりの思えをせむ業をいふ約なりは修のいふ

修のいふ

前中納言基成

さうふの系もたれは修の神をいふ修のいふ

珣子内親王

河のものと修のうたはれは修のあま修のいふ

修のいふ

前大納言忠季

たふあまのいふは修のいふ修のいふ

花園院御製

なつて今河ももきえき由としかるをねむ

前中納言為相

仍も此の所はなむ其のささけふは神代

前大納言為世家十首より神代

頼阿法師

文あつてみんとし相ふふふ其の神代

お元百を歌もつて此待意

昭慶門院一條

ちうとすは相ふつちう其のまがふふふん

負和百を歌りてさう波と意の神代

法皇御製

あつてむあつてあつて灯のきつてあつて物

関白前左大臣

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

寄意

太清門院御製

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

寄意

彈正尹邦者親王

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

菅原在夏朝臣

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

月前意とつて事

前中納言冬定



菅家万葉集序

菅家公の御筆の御歌の御集り

昌義法師

菅家公の御筆の御歌の御集り

法印隆則

菅家公の御筆の御歌の御集り

津守國夏

菅家公の御筆の御歌の御集り

純孝法師

菅家公の御筆の御歌の御集り

忠見

菅家公の御筆の御歌の御集り

惟宗忠貞

菅家公の御筆の御歌の御集り

菅家公の御筆の御歌の御集り

菅家公の御筆の御歌の御集り

菅家公の御筆の御歌の御集り

菅家公の御筆の御歌の御集り

菅家公の御筆の御歌の御集り

菅家公の御筆の御歌の御集り

菅家公の御筆の御歌の御集り

菅家公の御筆の御歌の御集り

初元百をよめたり 次は初建憲

後宮少輔

あつたかやうなる事と云ふ事と  
待遇と云ふ事と

昭和三十二年

あつたかやうなる事と云ふ事と  
悪逢憲と云ふ事と云ふ事と

信實朝臣

あつたかやうなる事と云ふ事と  
貞和二年百をよめたり

民部卿

あつたかやうなる事と云ふ事と

楠達憲

信實朝臣

あつたかやうなる事と云ふ事と

後二位宣子

あつたかやうなる事と云ふ事と

民部卿

頼宗法師

あつたかやうなる事と云ふ事と

藤原基世

藤原基世

あつたかやうなる事と云ふ事と  
永仁六年



正三位隆教

をのつとまらたのり源を社に家なるをまら  
別意

先をけより著とち記るも  
深時秀

あひせり著たのりた  
後期意といふ事とらるる

前大納言為家

るれまにえと清をて白雲の松を中

意あり中  
後二位行忠

あひせりとせり著たのり

藤原冬長

まのり別意とす  
海ををてとるやた

正三位次國

らよまにえと清をて白雲の松を中

右兵衛督基成

うはせりとせり著たのり

兼鳥意  
入道二親王号内

あひせりとせり著たのり

百景意  
時宗開意

権大納言義清

逢坂のつとまらたのり

恋文の中よ

後深草院

よみつゝのひみちをさあゆむにわたりてとてあはれ

様恋文

前条汝為秀

露もさけ上の里はら花の世と流る神のまは

左京よひつらきり

藤原仲文

神のまはれつゝを暎えいと露に花をうり

後朝恋文

皇太后之文

くちやとまをけりて花の終る床をたきうり

中宮書方合

醍醐入道前太政大臣

あひみくも名神をたあはれと花をうり

かうひつら之の七月の夜をてつらうり

いそ

赤深草院

七夜のまはれつゝを神のまはれつゝを

後醍醐院のまはれつゝの文とやをうり

恨別恋

後三位為理

わらわの中にあるまはれつゝを花のまはれ

様恋文

祝部成藤

うしろのまはれつゝを花のまはれつゝを

讀入

うしろのまはれつゝを花のまはれつゝを

曉別恋の文

前中納言基隆

持統の御時...

御時

法印御時

...

大江頼重

...

御時

万秋門院

...

御時

後宮

...

三位為繼

...

弘安元年...

院山院...

...

御時

躬恒

...

...

進子内親王

...

...

お中納言定家

...

慈母の中

後惠法師

あひまをいひて神成りあり其の海を其  
其經年慈といふ事也

後三位雅宗

清く其のけは日月のほりふけくを志し  
百三十五と云事なり也

藤原行捕朝臣

つむぎのきりきり様なりと云事なり也  
其

直昭法師

いそぎたけりて神成りあり其の海を其  
前衆汝為秀也

おのゝきといひて世にたけり其のけはり也

法印實顯

其といふ事なりと云事なり也

其終末也

故京經法朝臣

あやといひてたけり其のけはり也  
其終末といふ事也

前大納言為定

いひて其のけはり也  
其終末也

左兵衛尉直義

あやといひてたけり其のけはり也  
其終末といふ事也

深守法親王

と能くたのびたたるのやうき侍もある世なる人

花園院御製

あり世のちびるよせありく夏あははちの御もよみ

ちうとものや

新拾遺和歌集巻第十

恋歌

恋歌中

皇太后宮大夫俊成

うしろむねのきよゆいあまのいふそつうきあはれかきん

入道二所親王道助家より平首親一守花恋

前中納言定家

たのむちあきるれはらふみしるきよ花より夏にさあき

恋歌

藤原門院御將

あはれいふ新花の浪のうけ守るはるあはれかきん

花園院御製

うしろむねのきよゆいあまのいふそつうきあはれかきん

兼友戀

大納言師賢

あはれもさあきつかりさあはれもさあきつかり

性風法師

しるしのあはれもさあきつかりさあはれもさあきつかり

名前恋とてしるし

前中納言資平

うしろあはれもさあきつかりさあはれもさあきつかり

後花園入道前太政大臣家より十首の巻物

あはれ恋

中納言為藤

うしろあはれもさあきつかりさあはれもさあきつかり

あはれ恋

中納言経定母

あはれもさあきつかりさあはれもさあきつかり

人麿

あはれもさあきつかりさあはれもさあきつかり

中納言家持

坂上大嬢

あはれもさあきつかりさあはれもさあきつかり

あはれ恋

中納言家持

あはれもさあきつかりさあはれもさあきつかり

あはれ恋

あはれ恋

あはれ恋

三條右大臣女

その御物のつらみありかた結をきて神をよりのり

遇不逢恋

平政村朝臣

あまえく恋をばつとたありりやうすをたかふる旅なるま

野々次

康資王母

まゆふあま事うたけつ恋をよきつうなる元別

恋のあや

依見院御教

まはつるあま事ありえもあはたむ世あふり

後中人のをりり又ひまをさるる世のり

馬内侍

君あふそあふ人のほめは我をあらあふとて

恋のあや

大納言頭實母

ほかじふらふらうとまふあすをさるる世のり

後中多院宰相典侍令絶恋

津守国夏

たのま後の中とほひてひりとをう一程をたむひも世

戀のあや

前周白丸大臣

まきこねらりあえたのひ仍とからてをく余あゆむ

後法性寺入道前周自家首をあふ遇不逢恋

皇太后院別当

つまね成らふ神とあまきとと海のふたかたもや

周白前左大臣家むむとさうりてあはたふ不逢恋

前泰波為秀

その終るかたはついでにそのあつたはるまゝあつた  
文保自書ありてまづりつ時

中宮左大臣宗母

らあはあつたはる終てせよあつたはるあつたは

契應心

持大細云義詮

世あつたはる終てせよあつたはるあつたは

契應心

武部少輔の親王

あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる

法眼聖美

あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる

孝重の御書

思入道前格政大政大臣

あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる

文元 治承二年百三十五

後鳥羽院下野

あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる

信實朝臣

あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる

契應心

法性寺入道前周皇太后

あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる

百三十五

徳大寺前内大臣





長川の春にまはら山あり又ふりぬりしとて人  
文保三の百を尋ねたり

紫の御市に清水にけしきとていふもよきとて  
光の孝も入道前橋政家乃憲十を命を奉養

中納言定家

心あけぬかたは影とてあつた色を流しとて  
百を尋ねたり

前大僧正賢俊

ふしゆのふしゆもまじりてけしきとて  
けしきとて

まじりたる妹とていふもよきとて

小町

馬場の身につむとてけしきとて  
まじりたる

紀の國のあらしの息負我なりとて  
建長元年其まじりて

後二位行家

つむとてすまの海にまじりて  
けしきとて

いふもよきとて

法平定為

初瀬河むきよ水にけしきとて

百首歌えまろり〜と詠寄杖意

中国入道前大政大臣

とらせぬあひんとなのきくきやう〜とと入杖

無言中〜 實方朝臣

りらやうらりの橋の中流〜とと〜と〜と

寄杖意 源和義朝臣

志と流中〜と〜と〜と〜と〜と

〜と〜と 源基幸

浦と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

持中納言實直母

神のり〜と〜と〜と〜と〜と〜と

前大納言為成

あひつらひ〜と〜と〜と〜と〜と

百首歌えまろり〜と詠の心を

月花門院

まは〜と〜と〜と〜と〜と〜と

無言中〜 今出河原内侍

あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と

夜笠前内大臣

あひあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と

平親清女

ら〜と〜と〜と〜と〜と〜と

行蓮法師

又身心の憂悩を離れしむるにせむるは此の心也

壽夢遺

大慈行宗

あまのあまの憂を離れしむるにせむるは此の心也

源和氏

好む神志のたゞし憂を離れしむるにせむるは此の心也

貞和二年七月七日旨徳洞く之の心也

はらへしむるにせむるは此の心也

梅谷俊實

危く思ひしむるにせむるは此の心也

題志

藤原政光

ふふふふの憂を離れしむるにせむるは此の心也

正治二年正月

惟的親王

あまのあまの憂を離れしむるにせむるは此の心也

百をよめしむるにせむるは此の心也

清養

あまのあまの憂を離れしむるにせむるは此の心也

延久元年

式部院

あまのあまの憂を離れしむるにせむるは此の心也

遇不逢恋の心

今もあまのあまの憂を離れしむるにせむるは此の心也

絶不遇意

前大納言為世

其はたもたれしを此は流あつたなりたるは後より道

忘意と

源高秀

とる所をたれし出たなりしを我ちも此のまゝ

依見流より三十首絶えまつりし事

永福門院内侍

はるそと絶えし中の名所へまゝとて年々つてを絶え

百首絶えしとて絶え流意

用白前左大臣

絶えし又たりしつらふ風ありし後物とて絶え

藤原為重朝臣

ひつりつら絶え流ひきつら絶えしつら絶えしつら

家百首絶えしつら絶えし

洞院権政左大臣

たは絶えしつら絶えしつら絶えしつら絶えしつら

源仲教

つら絶えしつら絶えしつら絶えしつら絶えしつら

前系決定宗

かゝるものつら絶えしつら絶えしつら絶えしつら

宗卓憲とて絶えしつら絶えし

権信正果守

流兼原のつら絶えしつら絶えしつら絶えしつら

洞後校政家百首より逢不遇恋也

正三位知家

かろひし中書は徳目の枯風、今乃之る志あなむも折

折の心也

龜山院御歌

はつきり約ふかたの夕暮と身はうさ時と好縁を

平貞文考とて折らばてあひく病はれむわ片

はらばり

因院

白露の折きしう誰と恋つらん我もさごとく折れ

恋言は中

前中納言季雄

みちのかるる折らむ三月のうらむは折らむ折れ

兼月恋

兼月大信

むしをよめるは月とある物とたらくふてはなぬ恋

栄子内親王

なつづ折らむは月とある物とたらくふてはなぬ恋

山階入道前左大臣家十之孫高村月恋

折中納言云雄

なつづ折らむは月とある物とたらくふてはなぬ恋

折

壽暁法師

はらばり約ふかたの夕暮と身はうさ時と好縁を

平貞文考とて折らばてあひく病はれむわ片

江侍流

みちの折らむは月とある物とたらくふてはなぬ恋

又屋の母のいさるつあわりの世にあまのついでに  
そなたより換つたこととふくまふこといふ屋のついでに  
かゝるいさるつとていふはるんをいふこととせよ  
とらふていふこと 貫之

吾々の我々として世をわたりて自に奉るべきこと  
群一原 式部卿定家

玉座よりたふさるるおのれはついでに  
光の孝子入道前橋及家百三十五名有

いふ事いふこといふこといふこといふこと  
兼舟意と 藤原門院伝

あまの母のいさるつあわりの世にあまのついでに

芳海意 前桑次経宣

あまの母のいさるつあわりの世にあまのついでに

群一原 深貞世

あまの母のいさるつあわりの世にあまのついでに

前大納言為家

あまの母のいさるつあわりの世にあまのついでに

家衣意 右京為量朝臣

あまの母のいさるつあわりの世にあまのついでに

群一原 昭覚法師

あまの母のいさるつあわりの世にあまのついでに

恋歌中

已心院前橋政左大臣

あつらひにいとわづらひの衣をちりり中のまゝに成りてん

達智門院

かきかへりたる中はさか衣つてはつと物と成りてん

文保三年百景歌本をくまりのまゝ時

前系歌本實

神と成りたるをさしむるはひより神と成りたるの中乃成り

十首系命之戀 後鳥羽院流抄歌

くまのまゝにみづと成りたるはひより神と成りたるの中乃成り

ちりりたる

新拾遺和歌集卷第十

恋歌中

恋歌中

小断

くまのまゝにみづと成りたるはひより神と成りたるの中乃成り

西宮前左大臣

くまのまゝにみづと成りたるはひより神と成りたるの中乃成り

深養父

くまのまゝにみづと成りたるはひより神と成りたるの中乃成り

一條大政大臣

くまのまゝにみづと成りたるはひより神と成りたるの中乃成り

後人志す



後河之入色しとての葵ふとけ一葉の中若下但  
依見流の音つらう三十の神々

後西園寺入道前大政大臣

すなはちあまの志ふたむね衣の光をゆくと根幹あり  
元弘三年九月十三日河東少くくをむとてその家  
くまのつらき根幹を 前大納言為世

くまのつらき根幹を 前大納言為世  
光の孝吉入道前格政家系十首前合系細也

正三位知家

をく細ひくそあまの神の世えさくもくみおめ  
光の孝吉  
只飲法師 飯喜白切 じやん 飲 豊切 飯飯根

おはかたひりかへたなるをくまを成しつらうもくもくせ

鎌倉右大臣

かまをえたりあまの友あまの友あまの友あまの友あまの友

深兼氏

いりする友あまの庶神たの格ひあまの友あまの友

安土門院中條

あひくまかあまのいりあまの友あまの友あまの友あまの友

左善清結基氏

あまの志あまの志あまの志あまの志あまの志あまの志

洞院格政大臣家首の志あまの志あまの志あまの志

前中納言定家

よの世にあらざるをいふはありては本業にあらば  
百をあらざるは次は事なり戀

沛製

いふはこれかたは其のあつちをいふはありては心は  
中国入る前大政大臣

我ふは其なりとてたのまはありては心はありては  
光の者も入るお格政家十首ありては

後堀河院民の典約

人ありてはありてはありてはありてはありては  
文保百をあらざる時

前大納言實教

然るに志あるはありてはありてはありてはありては

志ありては

後深草院并内侍

ありてはありてはありてはありてはありては

文保百をあらざる

後醍醐院并内侍

かたはこれかたはありてはありてはありてはありては

群

らるる

いふはこれかたはありてはありてはありてはありては

矣經の志

前中納言云條

仍ふはこれかたはありてはありてはありてはありては

貞和百をあらざる時

等持院殿方大臣

正徳五年のことがよきか悪きか傳へてうみあつたよきよき

定暁法師

うむきくめりひきまじくふく教をみせしむるまゝん

文永二年三月後醍醐天皇御宇二十首御宇

恨意

信実朝臣

いそまふし身のこころをわづきふはあとのきよ

龜山皇子首あり

侍従為親

あはれういそをみしはこころをわづきふはあとのきよ

多乃心

二おは親王寛尊

たかとういむらひなる中いよのきよなるはこころ

藤原長秀

あとのきよなるはこころをわづきふはあとのきよ

友原良尹朝臣

あはれなるはこころをわづきふはあとのきよ

前田白左大臣

あはれなるはこころをわづきふはあとのきよ

正和五年九月十三夜後醍醐天皇御宇

あはれなるはこころをわづきふはあとのきよ

前大納言實前

あはれなるはこころをわづきふはあとのきよ

前大納言實前

すむ月の海より新まきも松島大人のつゝさたりたり  
みくも松相之とやうきこのまきも月より

中納言の藤

前納言の定

今よりうみまのついでに月をさやうとて  
燕のあそびりもゆかり

京極前用目大政大臣家服後

恨みきこの海よりつゝあかたりゆゆを力守りや

恨み意の心を

修理大夫政季

あまの筆をきかゆりせなほあまのついでに

むら

今出河院進清

うかすも程志すふれあきまつゝまきもあかりひるけき

貞和百をきあけけつてはよき世はあそびもきりたり

法皇御教

さそとあお屋「さそとあお屋」さそとあお屋

中国入道前太政大臣

ありとあお屋ひき我とたつゝあそびあそびあそび

意あそ中ふ

前大納言云藤

かひあそふもさそとあお屋いふをさなあおひらあそび

山階入道あそび天信

あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

源公信

かひあそふもさそとあお屋いふをさなあおひらあそび

文永七年八月支那内裏又首より恨意

前大納言為世

いづれもきつひをばすといふはあまふつとて

意ありかし 平親清女

うらまのいせあはるる世にゆりていまはるを

河津院中将

いづれもきつひをばすといふはあまふつとて

意ありかし 前大僧正禪助

うらまのいせあはるる世にゆりていまはるを

意ありかし 後深草院中将内侍

いづれもきつひをばすといふはあまふつとて

依見院清養

うらまのいせあはるる世にゆりていまはるを

二品法親王貴助

いづれもきつひをばすといふはあまふつとて

中務卿宗尊親王家白河守

藤原基隆

いづれもきつひをばすといふはあまふつとて

意ありかし 平親清女

いづれもきつひをばすといふはあまふつとて

道智法師

いづれもきつひをばすといふはあまふつとて

意ありかし 寛宣上人

いふまゝ人時を暇多かりき地とてまゝおぼつて居るを

藤原忠兼

掃くまゝおぼつて居るは掃く花の萎つてを散らすを

白河の如く七首をよみし事髪を

前大納言為家

玉のつゝふ糸神樂の系統りつゝ糸のつゝふ人

百首神楽をよみし事衣を

権大納言義詮

とほつゝみと雲のり衣をむらかひの井ふたう人

鷹司院師

今もつゝむらまをば井原もつゝ義詮をよみし事

うめまんののよとせあるけきん

和泉武部

世のふたふたふと恨久ら此をさき命なりは

ふつとつゝ女のほふたをよみし事

深師光

清くもあとの糸を恨久ら此をさき命なりは

悪争のやい

清くも恨久ら此をさき命なりは

金仁親王

つゝと世のつゝふをさき命なりは

後醍醐院御製

しき終りのこととて思ふはなるにほたるの月日は

くらげのしき

新拾遺和歌集巻第十六

神祇系

さくら木のかげに座をうすまふ鏡のりあせくかゝるささぬ  
しきの暦應元年まきの神木部にたてしき言尉  
後真乃清方とあり

海舟のふりまき事をたけりし海をたえせぬ後とありまき  
静明法師処暦ち執事解部とあり好日名の  
地を権現まきとて後新清まきの後たれりふ  
寶暦のふりまき事をたけりしとあり  
まきあつふまき月とてかきあきとありまきあつふまき  
は平治寛建元年日吉大宮の千僧住持まきあつふまき

の責之仁智海惠よりりて律師なる約言  
如海惠律師成字日吉まのりかり  
年月をりり今不志り竹まると人

おきまのりり看まの根と成てん今志り  
おまを豊田の法あり約なる此後真の由あり  
取ふまのりり今不志り竹まると人  
身子流るに様もり今阿三田山よりま  
竹まのりり今不志り竹まると人

延永六年日本紀竟事齊思兼律師  
阿保經覽

思ひたよりりり今不志り竹まると人

神祇方中に 後二位家隆

凡の世まのりり今不志り竹まると人  
大祚文の合し 深兼氏朝臣

祚よりりり今不志り竹まると人  
齊月神祇と事也

達智門院

らまのりり今不志り竹まると人  
花園院神位たりり今不志り竹まると人  
ありりり今不志り竹まると人

次泉

あまのりり今不志り竹まると人



群衆

大江宗秀

くまの風さ座の流や若くありて天照神の御影を

正三位成國

あふ神の御影を流りや若くありて天照神の御影を

源知新

天地のひまきくらりや若くありて天照神の御影を

清く〜

三塔のむらととて若くありて天照神の御影を

神祇考中よ

若木田延季

神を我ありて若くありて天照神の御影を

津守國夏

ちの神やゆゑの枝かたへん神の御影を

頃茂福久

さうまやうの流や若くありて天照神の御影を

法印昭清すゝめつらう石清水社二十神祇考

祝

前大納言為家

神を我ありて若くありて天照神の御影を

三十首ありて若くありて天照神の御影を

依見流神歌

石清水の流や若くありて天照神の御影を

神祇

前中納言有光

の神を我ありて若くありて天照神の御影を

弘安元年百首詠ありきり決

龜山院御製

石清水神宮のまきせきりひのすゑのりてのりて

年一決

梅室院御製

跡をたぐひて世あらん物傍の志や此れを神宮のり

惟宗光吉御製

いづる神宮の月もふらりてささるるるるるるるる

貞和二年百首詠ありけり時

同日前左大臣

のりぬるまきせきりひの花結風たきまればたけのり

元弘三年三首詠ありしは清水の院時宗

後醍醐院御製

九重の橋かたけりてはあや神宮のりて雲もくを人

年一決

前中納言親光

三代の詠ありきりては清水のりて河をたぐひて

法印幸清

いづるあや神宮のりてはあや神宮のりて世もくを

賀茂遠久

いづるあや神宮のりてはあや神宮のりて世もくを

賀茂遠久

いづるあや神宮のりてはあや神宮のりて世もくを

法印深源

後世に云世に神もさすも云の形もたのさるん

後三位教久

よあつらひ神のさる未嘗の世にめを引かきひさし

宗月神祇

平行氏

えいさのひさきせらるるも月神のさる神祇

等持院殿左大臣のさる世にめを引かきひさし

神祇

源和氏

いけら神もさるひさしや也座まをすりるさるる

社政院

後三位氏久

夏と云の所くさる神のさるひさしに神もさるん

神祇を

藤原長純

みささ神もさるひさしに神もさるん

中江神祇

喜の神の松毛の神もさるひさしに神もさるん

貞和百のさる時

前大納言経顯

おとさるのたさる神のひさしに神もさるん

春日社まのりて大將の事新やえさひひさし

り

三條入道前内大臣

三善ひさしに神もさるひさしに神もさるん

は後神もさるひさしに神もさるん

神祇

祝部成繁

くまのりくまのりくまのりくまのりくまのり

法印成運

あひつひて海らる日長松や七方乃及國さあ

祝部行親

あひつひて海らる日長松や七方乃及國さあ

法印延全

あひつひて海らる日長松や七方乃及國さあ

祝部成豊

あひつひて海らる日長松や七方乃及國さあ

祝部成中

あひつひて海らる日長松や七方乃及國さあ

らるる

あひつひて海らる日長松や七方乃及國さあ

藤原雅朝

あひつひて海らる日長松や七方乃及國さあ

信正良瑜

あひつひて海らる日長松や七方乃及國さあ

祝部行氏

あひつひて海らる日長松や七方乃及國さあ

祝部成中

あひつひて海らる日長松や七方乃及國さあ

白心

あひつひて海らる日長松や七方乃及國さあ

諸人ありす

ちよあつる者其しつりまはれり其の事神を知ら  
る元百を言ふ事一と云神祇也

後西園寺入道前太政大臣

いふ御玉ひらふまふとせり及も海を神と云ふ  
前大納言為世玉津御所と云命をうけ

津守國道

たのむ光をあらう神祇の成はまゝと神也と云  
兼安二年廣田社神名を判りしに於て

皇太后宮太后

おのりたまたまとせり今もその神ありと云

神祇

後三條常昌

神やあつる世のあらえをりもあつる神ありと云  
前大納言為家

後三條常昌

あつる神の由りありと云神やと云

神祇

内大臣

あつる神の由りありと云神やと云  
三條入道前太政大臣

あつる神の由りありと云神やと云  
前大納言為家

源直義

この世の世のたのむや交りて一糸の松と年を包めんと  
任者ふまうとくうりあり

伴勢大捕

あうてんらあま馬任者の松と浪引松乃好せ

後白河院河平松乃松と任者ふまうとくうりあり

約りり

権大納言隆秀

任者ふまうとくうりあり松をり松乃友とみりり

西行法師とみりり約りり白松とみりり

前中納言定家

ふまうとくうりあり松とみりり松とみりり

平政村朝臣

平政村朝臣

十人より松とみりり松とみりり松とみりり

西園寺入道お大政大臣任者松と三十松とみりり

松とみりり

前大納言為家

ふまうとくうりあり松とみりり松とみりり

松とみりり

前中納言為相

あまの松とみりり松とみりり松とみりり

法印雲禪

松とみりり松とみりり松とみりり

任者松とみりり松とみりり

津守國平

吾々も此の世に生かされしは幸なりと云ふは其の意

神樂と

十年

此の世に生かされしは幸なりと云ふは其の意

中務

さあ深く教へんとすよ山の松きくは木を

文をかく

新拾遺和歌集卷第十七

釋教奇

巨ろ舟一味のぬるか世とを相縁うなはむしん

はあ人住吉社よまうとくゆふの夜とあり治

室の普賢菩薩のゆふとありん

比叡山中堂にともめて常燈よりそかけ照きし時

傳教大師

おれを言の後の佛の世まるとひりほにそをほりとり大

修ひをまを終りし時粉川の親書おくぬれはあそ

らあそ

花山院御歌

ひらうの風をよむせわ灯のむらりよと照きし世の周

人の功徳はけりし而も捧地つるもいそぐ

大貳三位

清ききしむ此の焼く杯あり名とありてせし

群しん

慈覺大師

三東のひしひを製すは十の徳を垂りしりたせ

法苑經席也

清少納言

白粉の光り由り及みくむ組とむと好く知らん

前大納言為家日吉社より八誦抄をり約りて

二所徳ありすありきりふ方便也

花山院入道末末改也

りそひのせふそく結の月ありきり新なるに徳あり

辭喻也

花山院末末改也

りりきえれあつての出えりしそりて終り三乃小車

得未曾有非本所望

法華房親

かきつらむのいりて者座の終りあり海にありて

紀城喻也後真入於真永不同佛若の心也

入道二所親王等國

丹月やまのちたらく此よりきいしりて終りて

採薪及菓蔬

前大納言忠良

了未とらふの姑風いけりありてありて終りて

幼持也

後二位行家



口よりいふは虚言なりとては月影をまればさうあきし海は恨之

涌出也

前大納言資右

清光のひらく庭の河のうしろにとも白鳥の如きう地ひら

壽量忌

土御門入道前内大臣

いそぎ程とむたう河と流るる心人共あふれば毛を流つ

乘和質直者則皆見我身

前大僧正良信

ふろりさきふり水と流るるてさうさひやとれ共端の月

随喜功德亦何既於法會

法眼深兼

水上とねひもやせきさののたむをさむ白く筆のたて露

如寒者得火

寐蓮法師

舌のあそはあ〜とあひさえは乃新うあそ嬉〜

あき〜とさ〜ひ〜は花經かえあそ心とすり

〜えゆらふ普門に火坑變成池

中納言為藤

るは今の口を成ゆらる者いろう様ひは流乃水とす并に

母乃さあ不經か〜とら〜は教王品の心也

前中納言定家

まらたとあ〜とたのむ法あせ海らひ害もはさげ

普賢經我心自空罪福無主

寐然法師

かきとこれのふらむりてゆえのなるなり  
小野宮右大臣平目の海とたの國とを自捧地つ  
ちのゆけるは紙よ

用防内侍

世ふまのふらむりて逢うる一味のふらむり  
延文二年七月のふらむりて逢うる水信つふ  
ゆゑのゆゑのふらむりて逢うる  
文保二年のふらむりて逢うる

二和法親王覺助

ふらむりて逢うるふらむりて逢うる

高階宗成朝臣

高階宗成朝臣

はらむりて逢うるふらむりて逢うる  
十如是のふらむりて逢うる

前大納言宗明

ふらむりて逢うるふらむりて逢うる  
静仁法親王

静仁法親王

金剛經の是法平等無有高下のふらむり

法不實實

水信のふらむりて逢うる  
無量義經の字餘年未頭真實のふらむり

溥性法師

と氣しう字條のよれふあを續さう一處のひりや  
扇解脫風除世悩換

法眼深忠

ふろを世不入自は跡をすくむなるぬた乃下風  
世尊不説之説迦葉不問之問とるるんや

夢定國師

ゆしにむすもさあとの氣ききひてきくとすん  
尺教高し

左兵衛清徳直義

かりふを説きし法のあとなりとありて人の難達かん

圓風上人

きんたんと露の煮たのひぶあはりのきせいのあひや  
法師のかはけちうつひひきころく徳あるとて  
かたはらうし火のうそといひとあつたはると

赤澤忠門

清ぬき流乃未はぬぬもさとりとをわさるるきり  
二和名因親王書とたう所教とたてたひら  
けのうら

入道親王の道

とろのうらなをて照せよかけと現人法乃うら大  
お枯をかくるんゆらうあの中一物と

前大伴正慈勝

このえらううたはあはるん物するあはれけり

不偷盜戒

中務の宗尊親王

心願を奉りてと山里ありあつたをうけつて少人  
延暦寺戒壇を造らりて澄覚法親王を戒行  
せり時村のつひら

法印深全

法をたむくかむる時ありてとてかむるを  
識實性乃唯識の心と

前僧正顯通

遍

うけの心ひとやめさるるを心のかきまらむ  
天鼓の音ありて 後宇多院清教  
梅衣三世のたぬふとて折つて神をくるとありて

一色二香無非中道

僧正慈純

多しをも由とて法と同一なり花ありては  
善悪不二邪正一如の心と

前大僧正云澄

うあむのひら入のあみなるゆきまは法のあつたなり

世間相常住の心と 素性法師

世間のつひらみせと世の世はうらひをうけつて

心と

快子内親王

ころころのひらひらまはるるをうけつて

性嚴法師

河をきく衣乃を此玉と云ふそく世をうらひあはる

よるくしん

とあふ海をけく船ふ衣乃を此玉を去る福を

般舟讀一到殊施安養國元來是我法王家乃心

雙救上人

ゆふ又たの福をむせと位をせむしの花を救ふり

群く

権僧正因作

ふろし心のおは庭清く一筆を花ゆ胸乃をらむ奈

九和洋生のおと

兼宣上人

ら河のくむりくと花をらむ九和をく咲かむなる

谷苗半座桑花葉待我爾落同行人

法平願論

たのむをまはる人へ衣乃を花を花を

群く

讀人志く

心と花をみんむ世の露乃たむく法よあひ

仁明天皇御製

あふいしんをわらひかつてまゝとらなはり身なるん

権り僧都源信

衣衣ひしんをわらひかつてまゝとらなはり身なるん

五神通の中へ天耳通の心

各次雅經

遠さう於衣乃をまはるまゝとらなはり身なるん

弥勒也

前大徳心隆并

るん此の曉をまら月影の雲は上小をいん

天教を中一

お大徳心相守

まするれまふまにあらぬやみりまをいん此の月影

十位の中一 覚心不生のあらむ

法平守遍

跡の心さ意の心影の文様はひらとみるも迷ひあらん

法流の事 勅向よりまき養のつ時あらうけの

言り

前大僧正栄海

おまの榮とちさひひらふ雲射まを映つる考ら小旛院

法界慧性智のん也

なつて法のさるひらふおれをやえさる打りま

沙羅林也

崇徳院沙羅

栴檀たのむかける栴檀なり花のまき花神や如世に

雪やく木六の佛と作まて位書をとるる

瞻西上人

所の影乃林のみのきことあひらきあをれなりき

禅波羅密

後京栴播政前大徳心

心はあまの庭に栴檀を記し榮えうとぬ座の上

物成を流るる中一

慈威上人

夏あつちやんがむもさうらひの眠りひきくをけり  
穴の常行堂の流通の鐘の響けけり

心海上人

本堂の山をのりての鐘の響けり  
菅原寺の真澄の鐘の響けり

前大僧正良信

すくも池のうきはしとあて又たわらわの鐘の響けり

地藏菩薩

唐政上人

迷ひつらやみらのほのぼの海とあてあての響けり  
地蔵菩薩とあてあての響けり

為道朝信

夏あつちやんがむもさうらひの眠りひきくをけり

群

天台社皇院源

池の月小舟のうきはしとあてあての響けり

土御門院の響

池の月小舟のうきはしとあてあての響けり

月夜松葉とあてあての響けり

後醍醐院の響

雲間よりさうらひの眠りひきくをけり  
義徳院松葉とあてあての響けり

池の月小舟のうきはしとあてあての響けり

とあてあて

皇太后の響

ふんばの志を起しとあはれ月あふふとあはれ

究竟即の心也 前檀信心慈房

一むし程あつらふを修くこと致す形すあつらふ

心月輪の心也 前大信心良覚

あつらふ心月あつらふことすしあつらふはあつらふ

菩提心論の我見自心釈如月輪也

惟賢上人

あつらふ心月あつらふことすしあつらふはあつらふ

前大信心成惠は法流の事なりとくえらふ心也

檀信心覚伴

その心月あつらふことすしあつらふはあつらふ

前大信心檀慕大信慈濟灌頂さつらふ心也

前大信心檀慕大信慈濟灌頂さつらふ心也

あつらふ心月あつらふことすしあつらふはあつらふ

前大信心檀慕大信慈濟灌頂さつらふ心也

あつらふ心月あつらふことすしあつらふはあつらふ

懺法の慈悲の心也 同くさつらふ

思奉前開自友夫也

あつらふ心月あつらふことすしあつらふはあつらふ

鞍馬さつらふ心月あつらふことすしあつらふはあつらふ

前大信心檀慕大信慈濟灌頂さつらふ心也

和泉武新



ふりしほとむ事なれば物とては流るる

ひろすまの巻

新拾遺和歌集巻第十八

雑序上

早春霞々

後一條前関白左大臣

あまの戸たあふ社あまのうまにたらむとて朝霧か

群々々

く丸くあす

逢坂の宮あは君も消るにいと流くまき乃たてとぞん

山障子の絵より山々雲中あり

忠見

ふりしほとむ事なれば物とては流るる

鳥々

後京極権政前左大臣

深草や朝の床に寝ててまきの里よりふりしほの巻

松春雨也

氏初乃為明

春さるる春はあけぼのさかすか  
子春さるる春はあけぼのさかすか

順徳院御製

風さけ春のこゝろは未露却りて  
野春さるる春はあけぼのさかすか

入道二宮親王覺卷

野さるる春はあけぼのさかすか  
源時秀

山陰の春さるる春はあけぼのさかすか  
春先白き春はあけぼのさかすか

前大納言為世

あけぼの春さるる春はあけぼのさかすか  
中務の宗尊親王家百景歌

曲竹藤原親子

あけぼの春さるる春はあけぼのさかすか  
兼蓮法師

正三位成國

あけぼの春さるる春はあけぼのさかすか  
道助法親王家百景歌

春波雅經

あけぼの春さるる春はあけぼのさかすか

かすかたの宮を本のあるまゝとてたてしむる

野々原

法眼宗信

却て後よりこのまゝに建てる月をむくやうに

石清水寺合ふ月形霞

正三位知家

うら雲を敷くうら山をたてたる神のまは月形

百景あり中

花園院沙叡

聖人よき弟を縁の末とて深き家とてよくを在りて

野々原

左善清緒基氏

とて出るまゝありたりのうら山をたてたる神のまは月形

春のあり中

法皇沙叡

春のありたりのうら山をたてたる神のまは月形

百景あり中

前中納言有光

朝のけつとてなる君とてまゝに吉野の山をたてたる

山を桂臺の橋よりとてあくるあり

田舎法師

極より喜ぶるありたる八重橋かきたるありては

野々原

うら山

あつた後ありては喜ぶるありては老わらふあり

年をけてのちなるありては

夢窓国師

七年の頃の書きたたき心もさあかぬと云ふ

藤原真風

そのまじりたる心と云ふもあはれなるもの

法印兼舞

為すえちる心と云ふも山嶽なる心と云ふ

二和法親王尊風

喜風の心と云ふは心と云ふは心と云ふ

前大納言云薩

根の心と云ふは心と云ふは心と云ふ

藤原基名

山里の心と云ふは心と云ふは心と云ふ

弘安八年一月十二日 女首言事 時落花埋庭

前大納言為兼

庭の心と云ふは心と云ふは心と云ふ

并言乃時志と云ふは心と云ふは心と云ふ

梅系は資的

今心と云ふは心と云ふは心と云ふ

八條入道内大臣

家の心と云ふは心と云ふは心と云ふ

書きたる心

いづれも心と云ふは心と云ふは心と云ふ

小竹伝

光仁の御書に海軍の御事ありたりと云々

源和義親

光仁の御書に海軍の御事ありたりと云々

源和義親

光仁の御書に海軍の御事ありたりと云々

源和義親

光仁の御書に海軍の御事ありたりと云々

源和義親

源和義親

光仁の御書に海軍の御事ありたりと云々

源和義親

源和義親

光仁の御書に海軍の御事ありたりと云々

源和義親

源和義親

光仁の御書に海軍の御事ありたりと云々

源和義親

源和義親

光仁の御書に海軍の御事ありたりと云々

源和義親

源和義親

光仁の御書に海軍の御事ありたりと云々

源和義親

源和義親

光仁の御書に海軍の御事ありたりと云々

光仁の御書に海軍の御事ありたりと云々

かとき次は流るふまはし川の波をこぼるべし神の心

郭志

法印定宗

いよまねつ世風をとり対するをうき月の色たありて

平一休

徹安門院一条

子然里なきあふき月を粧つて長は思ひ神なく

朝中月翁

前中納言定家

玉水も志とるの朝のあやめ夢よりあるあふの聲

芥川寛

院清叟

ふあふんをせぬあふいよとくせとらたうき月翁

左近中将基冬母

とれつとたれをまの月影も又此のふき月翁のそ

夏山秋中

後鳥羽院清叟

友の孝と心ゆかりの娘うき心を高き月

二所法親王覺助家平首高子鶴川

津守國冬

あはれをせの流るうき舟影もふく秋のあはれ

夏草

藤原嗣定朝臣

いよまねつふつてくしりかたきあふの夏草

百々種めきわ次一休

清叟

夏草のたあつたき知るあふと世に様をうき

平一休

常盤井入道前大政大臣

友ら此草履の里の夕暮に坐りてあはれむる

権中納言雅孝

とていふ志すくこの水鳥をいふ書りては風を吹く

鷹司院師

山風流るる年之暮をいふむるをいふく櫻を流す

兼久元年内裏書合より抄る

前大納言伴平

くそくあつたやあつた人なまはるるに志すむすの勢

文保百三書中に後光の皇孫が園日左大臣

なる勢の勢よりかゝる友を風を流すの勢に松林に陰

勢より

後二位の家

入皇の松の志す葉を流すて夕暮すくはるるす

僧正覺信

夕暮りのそわわりの夕暮をいふすくはるるの勢を流す

源時朝

ひさしのたぐひのすくはるる風を松から松の葉より

松後總朝臣依見すて奇命のゆるる歌源の松

いふ事

藤原範永朝臣

松風の夕白くはるる映りては友をいふすくはるる

松の葉をいふ

法皇御歌

松の葉をいふ白霧のそわわりの勢をいふすくはるる

勢の後をいふすくはるるの勢をいふすくはるる

延喜式に云く、藤原氏の家

後深草院并内侍

藤原氏の家、神の世にけしきあり、たまたま、  
けしきありて、けしきありて、けしきありて、けしきありて、

藤原氏

権律師信覺

藤原氏の家、神の世にけしきあり、たまたま、  
けしきありて、けしきありて、けしきありて、けしきありて、

藤原氏

前大納言徳顯

藤原氏の家、神の世にけしきあり、たまたま、  
けしきありて、けしきありて、けしきありて、けしきありて、

安法律師

藤原氏の家、神の世にけしきあり、たまたま、  
けしきありて、けしきありて、けしきありて、けしきありて、

藤原氏

左近大將師良

藤原氏の家、神の世にけしきあり、たまたま、  
けしきありて、けしきありて、けしきありて、けしきありて、

後二位家隆

藤原氏の家、神の世にけしきあり、たまたま、  
けしきありて、けしきありて、けしきありて、けしきありて、

藤原氏

入道三和親王首實登

藤原氏の家、神の世にけしきあり、たまたま、  
けしきありて、けしきありて、けしきありて、けしきありて、

藤原氏

権律師景基

永福門院

藤原氏の家、神の世にけしきあり、たまたま、  
けしきありて、けしきありて、けしきありて、けしきありて、



ひるあつたれ夕日の影をりて木のこきらに露のちか

祝部成任

草末うもあつた神志志のせりむつたの枯木夕暮

深守法親王

作らるる時をまけむ白毛此をまひく秋暮の夕暮

題一八

く久へく一八

うき草末たふく秋暮りてをまひく世の枯木夕暮

兼室上人

世らに夕暮の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮

作持

始らるる夕暮の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮

友原元吉

ほのろり夕暮の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮

作持一急主捕秋の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮

の初自乃をせうろとあひ初暮りて夕暮の夕暮

作持大捕

かすぬる夕暮の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮

題一八

安陪宗時朝臣

後芽生ぬの枯木夕暮の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮

澄貫法親王

物あつたつ夕暮の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮の夕暮

人麿



祝部忠成

ありと秋なる時定りて其のたよりをこぞとぞいふらん  
道明法親王家早首等に曉麻

法三位行純

秋の秋を秋とてはらとる月ありの月も麻を鳴らる  
焼酒あり  
花園院沙叟

まろくは秋かすの曉の聲りもとれとあり明の影

永仁元年八月十五夜後宮御座り十首寄せり

秋高とていふ事と 前大納言俊定

かき書けりてはるる秋の露の厚きや海打の心

秋高

秋高

秋高とていふ事と 前大納言俊定

秋高別

秋高とていふ事と 前大納言俊定

前大納言俊定

あふふ公けりの秋風もあふふのたき秋の影

百首寄せり

前大納言俊定

夕白秋をたえりてはるる秋の影もあふふのたき

石浜水舟合秋高月

秋高別

秋風の吹をりてはるる秋の影もあふふのたき

秋高とていふ事と 前大納言俊定

深惠法師

好風吹わたる月見だうしありは浪乃きう文わ

秋葉乃中

左兵衛清基氏

秋を新くこの世道重なる君にのりなきわく村

月見あそび

持中納言云豊

文の雲をあつともたきまきて秋はる月の新花はひ

は集来てえひひとめはる日冠とさうりて新徳

しに深夜月と

民部卿の明

いふよゆせあはぬと秋つらふをたはる月見はるれ

年々

養蓮法師

今も秋は月見はるれと秋つらふをたはる月見はるれ

等持院贈左大臣

うた秋は月見はるれと秋つらふをたはる月見はるれ

貞和百首あそび

淑安門院小宰相

中乃秋は月見はるれと秋つらふをたはる月見はるれ

月見

道濟

秋をく成はるれと山雲の庭志るるそと秋月新

百首あそび

民部卿の明

五羽の月見はるれと秋つらふをたはる月見はるれ

家々あそび

平定文

石井らの懸念ありと水清を定めても人秋の懸念  
石清のありありと竹の村あり

菅原孝標朝臣

昔川の方をいふと園の世とかりと心立の昔月  
竹掛の桂の竹の村ありと竹の村あり

七条后

月をらたありと竹の村ありと竹の村あり

高階重茂

冬に竹の桂の竹の村ありと竹の村あり

大江經親

秋の暮のありと竹の村ありと竹の村あり

百景歌をいふと竹の村あり

等持院殿元太右

なをけりありと竹の村ありと竹の村あり

源宗氏

秋の暮のありと竹の村ありと竹の村あり

日前遠情といふ事

小侍江

いふ人なる来路の神ありと竹の村あり

月をらあり

前中納言定資

昔の暮のありと竹の村ありと竹の村あり

らる人あり

将もすゝ病のひりともみも玉田とて此の月の影

野月

雅成親王

之機那の本はた雲をたのめ人なき空の路を結ぶ骨

前大納言頼經家九月十日を尋ふるの月

真直昭法印

那波とて志のひま月を影とりけり芳気な事な家もあて

野月

深頼遠

寂州の床はうらみおきよふらひのさあめ月もあは

同日左大臣家とて冠とさうりて言ふるの月

海邊月

前系被為秀

智のころ月をそと風を吹けりさきさきとあはれに惜ま

湖月の空

後二條院沙叢

志を海やゆらさけく情の吹く波うらみ月をけ

元弘三年八月十二夜とてたてし冠とさうりて

の弁清のりうらみ月を露

藤原為冬朝臣

空のころ月をそと風を吹けりさきさきとあはれに惜ま

貞和百首を尋ふるの月

寺持院殿左大臣

誓をぬひ乃嵐をる終なき浪をたけつる月影

野月

藤原隆信朝臣

明のころ月をそと風を吹けりさきさきとあはれに惜ま

平高宗

るるの事記すはしむるは海防の計に事あり月記

依見院三十首詠の中

永福門院

高宗の月記をよみて成りし後御記す事あり月記

詠

式子内親王

口宣の詠にむす枝の色をよみて御記す事あり月記

正三位季經

ゆゑに御記す事あり御記す事あり月記

文保三年正月御記す事あり月記

中納言為藤

よき事の記す事あり御記す事あり月記

持成の中

侍従沙叢

持成の御記す事あり御記す事あり月記

元弘三年九月十三日御記す事あり月記

とよ事

侍従隆朝

よき事記す事あり御記す事あり月記

正和五年九月十三日夜御記す事あり月記

又首をよみて御記す事あり月記

前大納言為定

月記の御記す事あり御記す事あり月記

詠

法印中興

成り親花の月意を以て其のまゝ人の衣を以てん

と云ふ人々も

心もいとよしの里へは秋衣を以てていかにいとよき

二羽は親王寛尊

心もいとよき親花のまゝ衣を以てて其のまゝ人の衣を以てん

花園院侍松平くさつ時古月たる持の院院

幸あつたるまゝ前日御衣を以て親花を以てん

らせ新たりふ 依見後沙製

衣を以てていかにいとよき親花のまゝ衣を以てん

花園院院製

心もいとよき親花のまゝ衣を以てていかにいとよき

紅葉

入道二羽親王寛尊

秋衣の色もいとよき親花のまゝ衣を以てていかにいとよき

玄勝法師

心もいとよき親花のまゝ衣を以てていかにいとよき

建長六年九月十三日親花のまゝ衣を以てていかにいとよき

大宰府師範

心もいとよき親花のまゝ衣を以てていかにいとよき

十首秋衣もいとよき親花のまゝ衣を以てていかにいとよき

後醍醐院沙製

心もいとよき親花のまゝ衣を以てていかにいとよき

百首秋衣もいとよき親花のまゝ衣を以てていかにいとよき



前糸波實名

里はくく我をそ凡所く小舎に其の如き好のきり  
字は入道前田白如榮と凡不海ると同く此道  
言り

堀河右大臣

いふてあり心と行も其人如榮みおるも我を其好  
是故七の五并河行幸の時席をく凌秋とるる  
事とる如く

貫之

浪の上を漂つゆまの少くありとにちむる本糸波  
後醍醐院の十号親りいふ小曉情月とて是

前大納言實教

村とみり古の月は名流とて村に移りて如の凡

菅秋霜

前大納言為世

う能く能くの松原の神乃霜むすし程とて河結ふ  
實治二の百景親てまうりはる時初冬時を

冷泉前大政大臣

と親りりの時ありとけり行思の如し榮とてまき冬まき  
群一原

禅信法師

山嵐とのその許まも松名流ありむし時あり耶

藤原俊成朝臣

神皇とてありは約此も我とてとてとて時ありん  
百景ありて時あり

前大納言經成

かきし程久しとゆされ部り候ともかきしと候り時あり  
たかひとて

殷苗門院大佛

前内大臣

大井河内けみ水方なるありさるありしとてお業  
権中細言兼捕家屏風并

貫之

巨舟り候のたし河内なる白波のたりし若し候り候  
高市黒人

平河常  
とまきり候とて物と候のたりしむれありしとて

貯之山と本堂ありたりとて松ありとてのり候の松と  
文保百景歌あり

後西園寺入道お大政大臣

任賜詔を御風とてとて御所新松松等とてとて  
そまきり中

大正忠廣

冬松のまきりありとてかきしとてとてとてとてとて  
百景ありありとてとてとてとてとて

入道二所親王寛峯

此より新松とて松の松松とてとてとてとてとて

冬月方々

寺持院懸左大臣

我々もかきか小藤よりきき丸も月夜にさあ

冬冬籠籠とふも

院院浄浄製製

冬深きよりきき丸をひかり田の向は我の心

冬山冬山原原子子をを籠籠と

冬月冬月籠籠をを籠籠のの元元よりよりたたくく籠籠らら丸

二二羽羽籠籠親親王王賞賞助助家家早早きき元元冬冬曉曉月

中中納納云云為為藤

冬冬籠籠のの籠籠定定はは波波引引屋屋之之籠籠りり籠籠らら丸

冬冬籠籠と

宗宗久久法法師

冬籠を籠の籠とゆふ丸もきき丸も籠ら丸

冬籠を籠とゆふ丸もきき丸も籠ら丸

冬籠を籠とゆふ丸もきき丸も籠ら丸

冬籠と

藤藤原原長長秀

冬籠を籠とゆふ丸もきき丸も籠ら丸

冬籠と

系系切切法法師

冬籠を籠とゆふ丸もきき丸も籠ら丸

冬籠を籠とゆふ丸もきき丸も籠ら丸

梅梅家家俊俊實實継

冬籠を籠とゆふ丸もきき丸も籠ら丸

冬籠と

前前大大納納云云藤

冬籠を籠とゆふ丸もきき丸も籠ら丸

河千鳥

権中納言云雄

山科のこゝまはあつた敷子なるよまの法言なるの歌

百三十五号云と云千鳥

二品法親王号風

介たるる名もわかぬとては浦に於ては友子と云

権中納言

信杖法師

今更なる名もわかぬとては浦に於ては友子と云

権中納言

正三位通藤女

且千鳥と云とある千鳥の歌と云と云と云と云

後醍醐院女苑人云代

那のこゝまはあつた敷子なるよまの法言なるの歌

左兵衛督基成

なつたは枯葉の歌もたつたは月と云と云と云

百三十五号云と云千鳥

権大納言云義経

と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云

身子法言云と云と云と云と云と云と云と云

七のみの娘と云と云と云と云と云と云と云

身子法言云

老らるる子なる歌と云と云と云と云と云と云と云

依目法言云と云と云と云と云と云と云と云

延政門院新大納言

海に雲霧の子馬影くさく志のひかへたありて  
細代約友と事也

道因法師

わろくそくく人のまきまを流くはらて日なぐすん

鷹狩とあり 源氏頼

わろくそくく人のまきまを流くはらて日なぐすん

冬の中は 源氏

若ふのころと人をいれ玉藤のふたなきあつた

控律師則祐

梅のふれ舞の穂せしむく文ととをくさくあれぬ

若ふと 前奉教有

わきとあれと梅のふれ舞の上をくさくあつた

若ふと 源頼隆

あつたのふとあつた初名と都のまをくさくあつた

初名と初名持は照左大臣とあつた

夏定國師

とふ人の梅のふれ舞をくさくあつた

冬の中は 源宗氏

浮名れふれ舞のふれ舞をくさくあつた

後醍醐院女院人更氏

あつたの梅のふれ舞をくさくあつた

唯賢上人

さし給ふらひ出みまじ白紙の雪をけりてさるる稿

藤原盛徳

那由と志ゆりまきし道のがらむにうらむにうらむ者

百景歌をえまうり時書

前用白左大臣出書

雲の影のさきよは海にくまきいつまぬと物に書

友原為重朝臣

風越の表乃少きとゆへて木書みまきと物に書

範室上人

いと物ゆきと物に書とよまひあつたる乃と書

大納言經信さしと物に書と書乃のあつ白紙を

と物とて書つて物に

加賀左衛門

新ぬ海つとりうら雪よりえつた身とやまきと人

大納言經信

首とゆひ海つじ書乃とて物に書と書乃のあ

百景歌をえまうり時書

前大納言忠季

雪乃影のさきよは海にくまきいつまぬと物に書

等持院殿大納言

春かしのうらむと物に書と物に書と物に書

嘉元二年二十首乃のあつたる夜に書

中々々々々々々々 依見院抄製

星々々々々々々々 依見院抄製

中々々々々々々々 依見院抄製

中々々々々々々々 依見院抄製

中々々々々々々々

野宮元大治

中々々々々々々々 依見院抄製

福元中の人

新拾遺和歌集卷第十九

雜奇中

百首歌めきり 依見院抄

抄製

中々々々々々々々 依見院抄製

中々々々

依見院抄製

中々々々々々々々 依見院抄製

中々々々 依見院抄製

前大納言為世

中々々々々々々々 依見院抄製

中々

源氏經朝臣

松平の村を流るる世の世も改めぬ  
松平百三十五

二品法親王實助

松平の村を流るる世の世も改めぬ  
松平百三十五

前中納言定家

約三の昔を流るる世の世も改めぬ  
松平百三十五

前大僧正孝覺

松平の村を流るる世の世も改めぬ  
松平百三十五

後三位行尹

松平の村を流るる世の世も改めぬ  
松平百三十五

花園院清教

松平の村を流るる世の世も改めぬ  
松平百三十五

清教

松平の村を流るる世の世も改めぬ  
松平百三十五

梅窓使云通

松平の村を流るる世の世も改めぬ  
松平百三十五



神々

平養時朝臣

わが世は神々のまにまにと海を渡るをえん世の法は  
高元百々神々の時

法印定為

少乃神也田子神浦よりみれば世は神々のまにまにと  
神々

法皇御製

くまのや神々のまにまにと海を渡るをえん世の法は  
高元百々神々の時

龜山院御製

後には神々のまにまにと海を渡るをえん世の法は  
高元百々神々の時

前大僧正道昭

まはし世の神々のまにまにと海を渡るをえん世の法は  
神々

修理大夫政季

雲々の神々のまにまにと海を渡るをえん世の法は  
前大納言實教

く世の神々のまにまにと海を渡るをえん世の法は  
天台座主忠尋僧正に如く神々のまにまにと海を渡るをえん世の法は

神祇成仲

日おきく位のはる成り、山ありあはる表とくえみ世  
高元百々神々の時

つらふとあり

友原為邦

位下も推挙のかけがえ我のつとめは是れをす  
清浦朝臣之位を仍つて不承せり

太宰大貳重家

じつそのつとめを承りしゆりまを承りしゆり  
かうりけしゆり又承りしゆり承りしゆり

藤原朝臣

おのりあけしゆり承りしゆり承りしゆり  
百景清言の中に鶴とありしゆり

月花門院

孝之ひのちを承りしゆり承りしゆり承りしゆり

名和百景

順徳院

若多より増みりしゆり承りしゆり承りしゆり  
忠見津國より忠見津國より承りしゆり承りしゆり  
承りしゆり承りしゆり承りしゆり承りしゆり  
承りしゆり承りしゆり承りしゆり承りしゆり

天曆抄

乃かきしゆり承りしゆり承りしゆり承りしゆり

忠見

承りしゆり承りしゆり承りしゆり承りしゆり  
應和二年一宮弁合

讀入〜次

田子浦の浪之のつけし神とて人々をばらばら

文保三の百そあまけり時

前大納言為世

そらかり和文の海津を以ててていふ名をけり

群〜次

善源法師

松尾の波たりの津は極風と申すをさしきりて

貞和百そあまけり時

中宮大友の宗母

かろつはまればむのみなを海にたもあつて神の言

群〜次

後醍醐天皇の製

龜の巻つらあそみとては清浄のしをす後七

貞和百そあまけり時

中国入道の大政大臣

けりする海舟の舟とては竿のうしろをたよりあまけり時

何とらあり

後醍醐天皇

大軒のみなをいそぐ先陣たてし後あつて世や

文保三の百そあまけり時

けり時あまのつげきた

真子院の製

世中にあつて音のみなをけりし雨とありぬり

群〜次

前内大臣

代たぬ用は海河のふまきけは高川も海軍も名をたす  
あせつろ宿あくしゆる

平兼成

石間より流る泉をむきあはむじよとあは事やあは  
とよみの海あくしゆる

徳因法師

都人きあはる流るなとあは海とあは流るあは  
大賞とあは海あはるとも困はつてあは流る  
あはつと困るあはるあはるあはるあはるあはる  
かりと流るあはるあはるあはるあはるあはる

西行法師

ふたあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

法印定因

あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

祝部成久

あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

法武部

あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはるあはるあはる

三條院抄巻

はつとて中つじき海行のしほりまをさるるさるる  
百もあまふとて庭行

右大臣

家の風が成ゆきを中代あまふり又けるひの庭の長行

竹をらめぬ

正三位有範

長行の定代りまはつとて中つじき海行のしほりまをさるるさるる

前中納言為相

ひのまきと友とふはれた長行のうまやうりまをさるる

子長百書方命

後二位家隆

だうてあまふとて海行のしほりまをさるるさるる

赤元百も歌をり時述懐

後山奉前左大臣

とあふらうるまにじまてあまふとて海行のしほりまをさるる

後醍醐天皇の文神のかとある成之後字多は物園

中筆約たりふつとて中つじき海行

六條内大臣

老らぬあまふとて海行のしほりまをさるるさるる

弘長元年百も歌をり時述懐

前大納言為家

はつとて中つじき海行のしほりまをさるるさるる

群一原

後清和

長行の定代りまはつとて中つじき海行のしほりまをさるる

康安二年三月古今集の家談よりめき事

傳之竹とるを梅窓使実継より茂と事内証

竹とる 氏部と為明

若菜の竹とるを梅窓使実継より茂と事内証

梅窓使実継

和歌の竹とるを梅窓使実継より茂と事内証

續古今竟集事

後二位行家

敦海より此志と事の中に分ける玉と事内証

弘安元年百多事内証

前大納言為氏

弟の代にかゝるひと事内証

貞和百多事内証

等持院殿左大臣

伴あり可し此名をまゝとる心なりと事内証

中納言為藤

三笠より此名とけし竹とる事内証

弘安百多事内証

前大納言為氏

めりあふ雲の竹とるを梅窓使実継より茂と事内証

後三位藤子八幡又此名とけし竹とる事内証

前大納言為氏

道

中のくまをなほりて位にありて結意月をみちぬ  
蘇人といふ言ふかうしり新くせりて

藤原高範

位にありて多しを言ふ月と成りて  
貞和百を言ふ時

前中納言雅孝

まひをいひて位にありて言ふ月と成りて

八條入道内大臣

二休をいひて言ふ月と成りて言ふ月と成りて

後中院前大臣

七年の神代御座りて言ふ月と成りて言ふ月と成りて

家平首言ふ月と成りて言ふ月

彈正尹邦前親王

身もまはりて言ふ月と成りて言ふ月と成りて

前大納言為氏

なほりて言ふ月と成りて言ふ月と成りて

惠慶法師

口もまはりて言ふ月と成りて言ふ月と成りて

藤原為顯

口もまはりて言ふ月と成りて言ふ月と成りて

口もまはりて言ふ月と成りて言ふ月と成りて

寄身述懐

源氏賢朝臣

くちか身かきとれおろの世とをきこわたりとて感嘆  
竹林院入道左大臣等右衛門少輔清盛公  
おきこゆをうて治せせらねり

依貞院清盛

書こじつに水蓋のたつひをうじ治かみとて  
清盛より書とせうと書物にたたり

後二條院清盛

くち世にうじたりと書と治かき水蓋に  
文和二年十月大書會總紀方々讀かえ代の  
古事とるなり 後二位行忠

みよひとて出るあはれ治せしお代乃とて  
人の心奉りせらるる治せと書物にたたり  
治せられたりなり

大納言經信

治せし家のつとて治せと書物にたたり  
屏風の絵と書物にたたり治せと書物に  
くちわたり

くち治せとて治せと書物にたたり  
右近大將道總家々々治せと書物に  
くち治せとて治せと書物に

照法印慈應



梅うららふ心なきかたわらわ世にまはるるあまのこころ

也

道命法師

わがこころを油料とてこころをたたくる心りをたれ

貞和二年百三十五歳

中国入道前大政大臣

天保十一年三月廿七日卒

山家のまことくふん約

前住心實伴

言初は梅のつみゆら松のたけをほくも梅うららふ人

述懐あり

平貞秀

梅のつみゆら松のたけをほくも梅うららふ人

百三十五歳

中国入道前大政大臣

わがこころを油料とてこころをたたくる心りをたれ

山家のまことくふん約

戒仙法師

言初は梅のつみゆら松のたけをほくも梅うららふ人

述懐あり

前住心實伴

わがこころを油料とてこころをたたくる心りをたれ

也

惟宗行冬

梅うららふ心なきかたわらわ世にまはるるあまのこころ

前住心實伴

案の元はあつてけりとの位のをとちりあきき家の松

庭家の庭乃松也此園より山家松あり

竹堂より 頓阿法師

友とて松ありとてとて松山家也

山家より 法皇御製

山家の松ありとて山家の友とて松あり

山家百首歌山家

前大納言為家

孝子の著る松とて山家の松あり

建仁三年攝官弁合山家松

後鳥羽院御製

教人の松をとりて山家の松あり

山家より 藤原冬隆朝臣

松とて山家の松あり

山家より 法皇御製

あつて松ありとて山家の松あり

山家より 藤原高亮

山家より 藤原高亮

山家の松ありとて山家の松あり

山家より 後人あり

後の松ありとて山家の松あり

法印梁清

その縁由はたかたかた世の縁由もあつた

只誠法師

きよとむらうらむの縁由も人のとむらうらむを言ふ

山家言ふ  
梅雲使云致

さふのあまの御心里を世にすてふ人の言ひ

源政氏

人との縁由もあつた山家も人の言ひもあつた

源頼仲

志強のせそ入りたれはひあつた人言ひもあつた

洞院権政家百首言ひ

藤原朝村

さふさふの縁由もあつた山家も人の言ひもあつた

東山言ひもあつた

お大徳正尊

あまの縁由もあつた山家も人の言ひもあつた

山家の言ひ  
法印神守

さふさふの縁由もあつた山家も人の言ひもあつた

山家言ひもあつた

法印神隆

あつた縁由もあつた山家も人の言ひもあつた

ひらりる國の縁由もあつた

藤原朝村

有りたると心ひらけしむと秘すそ山田村住僧

田家始

人 信正相覚

信正相覚の父の田村の村の住僧の父の田村の村の住僧

百三十五番 河田家

二和法親王尊胤

その時より田の向極遠く風を捲りたる

大納言政実母

世の中は心算なり乃庵すなりと云ふなりや田村

今も村のあまなりと云ふなり

是法師

なる世のまきと云ふなり世の故をまきと云ふなり

むら

前大僧正頼仲

ありて世をたけたる大寺のあまなりと云ふなり

前大納言良冬

いかに世のまきと云ふなり世の故をまきと云ふなり

述懐方中に

大僧正忠性

いかに世のまきと云ふなり世の故をまきと云ふなり

和河法師

いかに世のまきと云ふなり世の故をまきと云ふなり

法印長舞

いかに世のまきと云ふなり世の故をまきと云ふなり

老後述懐といふ事也

彈正平邦有親王

の御代と世はかゝるも神のまを志すは海打り

群一

寛宣上人

かゝる世はかゝるも神のまを志すは海打り

法印經源

後世の世はかゝるも神のまを志すは海打り

藤原成友

は軒ぶりたありも志すは海打り

述懐系小

深光正

後つる世はかゝるも神のまを志すは海打り

宗祐法師

の世はかゝるも神のまを志すは海打り

後三位實遠

たつ世のまを志すは海打り

一條太政大臣

あすの世はかゝるも神のまを志すは海打り

三善直信

かゝる世はかゝるも神のまを志すは海打り

貞和百三詠也

入道二お親王法守

かゝる世はかゝるも神のまを志すは海打り

兼持述懐也

藤原宗遠

東海のつらき橋のつらきとて思ふもたれやを修むらん

源直氏

永福門院内坊

わきまのたれもかけぬとてあはれなるらん

源直氏

ねむらぬとてきつらう思ふもたれやを修むらん

源直氏

藤原雅朝の坊

そひきぬらぬとて思ふもたれやを修むらん

真後法師

ねむらぬとてきつらう思ふもたれやを修むらん

源直氏

法印宗尋

ありとて思ふもたれやを修むらん

惟宗忠景

世に思ふもたれやを修むらん

清原通定

うらやまの思ふもたれやを修むらん

源直氏

平政村朝臣

うらやまの思ふもたれやを修むらん

云寛法師

うらやまの思ふもたれやを修むらん

を成すもたれやを修むらん

信生法師

いふおのひのむすぶ世のうらやまのうらやま

むすぶ

津守國助

たふとくくひもあまの月見つるけりよふにむすぶ

高直述懐

権少僧部行願

たふとくけりあまの海世のうらやまのうらやま

源和義朝臣

ひと玉のふみあまの身とけりあまのうらやま

源義高朝臣

誰とあまのうらやまの世のうらやまのうらやま

二和法親王賞助家平首言述懐

後二位經尹

そらあまのうらやまの世のうらやまのうらやま

むすぶ

後鳥羽院御製

たふとくけりあまの海世のうらやまのうらやま

法皇御製

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

うらやまのうらやま

あまのうらやまのうらやまのうらやま

前権修正雲雅

あまのうらやまのうらやまのうらやま

山田法師

あまのうらやまのうらやまのうらやま





入道三河親王法守

たかかきとてふらんかきとてふらん世のむしにたせし

あつらん

新拾遺和歌集卷第二十

雜歌下

短歌

やの山のそみくらゆる

赤く

あつらの

ひき目り

赤きく

たるかき

すくらう

面世ま

あまを

かりまき

ひらひの

新くらひ

くらひの

光るかき

あまを

ひらひ

あまを

あまを

くらひ

ひらひ

くらひ

あまを







すは深の神乃のふかまをたてし山乃身まておのあ  
ふあなふたを

群一〇次

源有長朝臣

さうりあるの世より遠くあきやの川海より遠く  
まじりぬるくし書

折句

藤原仲實朝臣のまことうかり遠くたてし

萩の枝よりして

後頼朝臣

うむとふあそや麻のまきとておれをいへんを  
也

藤原仲實朝臣

うめこの麻よりいへんおれをいへんをいへんを

ひまのまを

前大僧正慈法

今をいへんをいへんをいへんをいへんをいへんを  
まのうらなふらうらふらうらふらうらふらうらふ  
事と折句の書冠とていへん

一〇次

たけあせとあがらふらうらふらうらふらうらふ  
ひまのまをいへんをいへんをいへんをいへんを  
か

後名解法朝臣

まのうらなふらうらふらうらふらうらふらうらふ  
さしやうらうらうらうらうらうらうらうらうら

後頼朝臣

さし家の家名をとりてまきこはる屋名を風流とす  
物名

但馬國ついで家より結へおのりたるまきこ

貫之

まきこついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす

かろや

松の野をとりてけりて松を風流かろや神志とす

まきこついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす  
前中細云定家

神志とす松をとりて松を風流かろや神志とす

かろやついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす  
左近中将具氏

かろやついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす

かろやついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす

かろやついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす

かろやついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす

かろやついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす

かろやついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす

かろやついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす

かろやついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす

後三位頼政

かろやついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす

かろやついで家名をとりてまきこはる屋名を風流とす

皇太后宮女大友俊成

好子能うと云は書たも少く成ふと書たはしり

あゝのたり

山里之姑と松尾琴之をぬ野田うらまのいせこを

やうかどけと 入道二品親王性助

とぬの海あはれ鳥のあうらりやうかどけさう様

誹諧

山鷲と

中務卿宗尊親王

まのそくくさめい山里のゆらううひすれ終

群々

大江千里

玉柳なり枝のまけせは雪とじらうたな

後惠法師

うきよはあふもま今まをり終てむく喜乃山風

忠見

秋とひかりの揃ふつりせと起らうり光さき高見

音のうらうらあはれ後のいあおれらう終てせえ

よあはれせせせせ

藤原仲文

白雲しせうああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ

せうりあはれ

藤原實方朝臣

よとらてちのあうらとあうらとあうらとあうらとあうらと

はむき入道前用自家男物うらうらとあうらと

おき物とほしき出されりけむわをひとら  
みふあめ物おとほりて乃目よりり宮  
あふを足とのあをひとけりてと女居  
也。いにあり 清浦朝臣

玉かをのらり井と宮に物と許とあり  
様泊とあり 光俊朝臣

若るはかつしあ縄よりきけしとまりきしひ  
年一 後二位行家

トおきあえつらあわらちりやと足とつら  
入道二お親王性助家又十とあり  
後西園寺入道おた政朝臣

風あき山田の唐のあすれ河をよけてとら  
藤と 正三位知家

はの目くら外あか藤あけ又人けりて  
暁水鶴と聞く 久人一

あふとれとてえ夏家あふと水鶴なら  
一取れとれとていりてあり

いあけし物のおけ一取れとれとていり  
柳風とあり

西行法師

みまをさかあめあくらりけりて風とら  
夏治百とあり



前大納言為家

此書は山本松平の日記に記されし文保三の事なり  
文保三の百三十九日

権中納言云云雄

大納言の事なり此の如く記す

中納言の事なり

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the name '前大納言'.*



